



酔いどれて

#1

人はいつも何かしらに酔っていると僕は思っている。だけど、これ以上先、格好いい言葉は思いつかない。

読んでいって来てありがとうございます。実はブログの方が更新早いです。では、そういうことで。

天然ぱーま

おっばいが縦横無尽に揺れていた。彼女はただ道を歩いていただけである。美人ではないが、そばにいと落ち着かせてくれるような体型をしている。だから彼女の隣には男がいる。彼はそこで安心しきっているのだ。こういうのは、昼間のうちに私がよく目にする光景のひとつだ。そしてまた今日も見ってしまった。

暗くなってから、私はとりあえず飲み屋に行き、酒を飲む。どうにかして何もかも忘れようとするのだが、記憶はひどくなる一方だ。つまり、それらはより鮮明になっていく。どういう構造になっているのかわからん。ひょっとしたら私は人類の皮を頭からかぶった新人類なのかもしれない。思い当たる節ならいくつもある。たとえば、私の友人のひとりには記憶力が良すぎて頭がおかしくなった。

このところウイスキーばかり飲む。本当はワインを飲みたいのだが、最初に飲み始めるのはいつも決まってウイスキーだ。ウイスキーと水。飲み物をがぶがぶと飲んでいると、気付いたら手にしたグラスはいつもからっぽになっている。しょうがないから私はまたウイスキーを注文する。いつまで経ってもワインに追いつけない。ウイスキーを飲んだあとには水を飲まなきゃいけないし、水を飲んだあとにはウイスキーを飲まなきゃいかん。

そこで私はべつのカウンターに座っていた、ワインを飲んでいる女性に声をかける。やあ、お嬢さん。そのワインはおいしいでしょう？ 私の一番おすすめですよ。当然だが、誰も彼もが

私の話になににこにここと笑ってくれる。彼女と隣り合って、ワインの話ちょつとする。私はワインの銘柄すら知らない。彼女が飲んでいるのが赤なのか白なのかもよくわからない。が、それは酔っ払っているせいだと思う。元気なときには、ちゃんと見分けられるはずだ。そう願いたい。酒を買うときにはちゃんとその分のお金を払ってるし。だって、赤と白だ。間違えようがない。赤とピンクなら難しいが、あるいは、赤とブラックとか。でも赤と白だ。大丈夫だろう。私は元気。ワインの色を訊ねるのは、空の色を訊ねるのとはわけが違うが、実際それは時と場合による。

彼女は私よりも歳上に見える。本当に歳上かも。でもふたりは年齢の話をしてない。もちろん、私からその手の話を持ち出すことは決してない。私は彼女の匂いと声の響きに夢中である。あるいは、手に持ったグラスの中にあるのが赤なのか白なのかを見定めることに夢中なのである。昼間見かけるような女の子たちとは違って、彼女にはあまり胸がない。鎖骨から下あまり出っ張っていない。そもそも胸というものが無いのだ。目のやり場に困らなくて助かる。どこだい、おっぱい？ ああ、そこにいたのか。ずいぶん探したよ。と、こんなことを言うとたいてい殴られる。

私はウイスキーを飲み干す。彼女の顔がすごく近くにある。口から酒のにおいがする。彼女は異常に酒くさい。しょうがないから私は彼女の頬にキスをする。しかし彼女はわざと顔を動かして、私は彼女の唇にキスをするはめになる。それから店を出るはめになる。私は彼女とふたりでいろいろと挑戦する。清潔そうに見せかけている貧相なシーツに包まって眠る間に思うのは、そこ

の宿泊代が私の財布の中身で払えるのかどうかということだが、酔っているのでまともな計算なんてできず、私は眠る。このようにしてどうやっても記憶がまたひとつ増えてしまうのだが、頭が良いのでしかたがない。

気にするな。なにかの宣伝なのだから

YOUTUBEのチャンネル

→洋楽、邦楽のカバー動画をあげている。

天然ぱーま

→小説、エッセイ、その他適当な文章を書いている。

【泥酔日記】「酔いどれて」【連載】(#1)

<http://p.booklog.jp/book/98242>

ちょっくらコメントしてみる

<http://p.booklog.jp/book/98242>

本棚へぽいしてみる

<http://booklog.jp/item/3/98242>

他の作品【夢日記】「説教」を読んでみる

<http://p.booklog.jp/book/96927>

著者について

<http://p.booklog.jp/users/krukruchorochoro/profile>

いつも読んでくれてありがとう。

